

ライバルの娘やまの寺さ計画

子作の教室

小説 木森山水道

挿絵 みかわや

立ち読み版



一時間目	ライバルお嬢さまのおれ打倒計画	006
二時間目	人口対策の離島の生活は剃毛から	044
三時間目	愛撫の予習と実習	089
四時間目	初体験の対策予習	148
五時間目	サボタージュ	190
六時間目	初体験と娶り実習	202
七時間目	間男撲滅対策実習	228
放課後	おれとライバルお嬢さまの幸せ計画	251

登場人物紹介

Characters



はなぞの びゅあら

華園・P・エレクトラ

文武両道で芸術にも秀でているお嬢さま。誰にでも優しく、誰からも好かれているが、なぜか墨根にだけは挑戦的な態度をとる。



ひゃっか りょうらん

百花繚蘭

子作りを目的とした特別教室の担任。厳しい口調で、デキの悪い生徒には容赦がない。普段は厳しいサングラスをつけている。

ぼくね じん

墨根 仁

いい成績をキープして、いい会社に入り、楽な生活を、と夢見るガリ勉の堅物男子。学園一の秀才だったが、ある日突然特別教室に通うことに。

ベッドで寝ていたのだから、頭に触れているのは枕だろうが、感触はいつもと違う。

(柔らかくて、広くて、温かくて……ミルクみtainな甘い香りがする)

胸中で呟いてハツとした。明らかにおかしい。

「おはよう、墨根仁」

カッと目を開くと、こちらを見下ろしている女子と目があう。

それがありえない人物だったことに驚いて、思わず叫んでしまった。

「は、華園・P・エレクトラ……!! なんてお前がおれの部屋に！」

学園の人気者であり、ライバル視して突っかかってくるお嬢さまその人だ。

こちらが驚いているのが面白いらしい。彼女は悪戯っぽく笑いながら言った。

「ここは墨根くんのおうちではありませんわ。【特別教室】の舞台ですの」

「とくべつきょうしつ? なにをわけのわからな……」

言い終える前に墨根は異変に気がついた。

自分がいる場所がありふれた教室の中。だが、席についているのは見知らぬ顔と制服ばかり。さらに不可思議なことには、席と席の間が五メートルも離れている。窓から水平線が見えることも、自分が通う学園でないことを示していた。

もっと言えば、寝間着で就寝したにもかかわらず、今の自分は学園の夏服を着ている。

着た覚えなどまったくないのに。

「ここはどこなんだ……？ どうしておれがここにいるんだよ……」

「フフ、ここは劣等生が送られる【特別教室】ですわ」

「……それは！ 無理矢理作りさせられるっていう、島の特別教室かつ！」

知り合いの番たちの話を思い出す墨根。ありえないと思っていたことが実在していたことに衝撃を受けていると、お嬢さまが不敵な笑みを浮かべて説明してきた。

「どうやってもあなたに勝てないわたくしは、睡眠薬入りの栄養剤であなただを眠らせ、テストを欠席させて、オールゼロ点にしてあげましたの。そのテスト結果と、わたくしの家の権力と財力を駆使してここに連れてきた次第ですわ」

「……!! お、おれの親はどうした？ 息子を赤の他人のお嬢さまに渡したとでもッ」

「これ位包ませてもらったら、快く預けてくださいましたわ」

金持ちのお嬢さまは、白魚のような指を三本立てた。

「うっ!? そんだけ出されたら渡す……かもなあ……うちの親は……しかしお前はなんてことを……おれの人生設計を滅茶苦茶にしやがって！」

トップをキープしいい大学に入り、いい会社に入り、両親と共にラクな生活を送る。

それが宿願であり、なにより大事な夢だった。

そのために、周囲に嫌われてもひたすら勉強を続けてきた。

なのに、お嬢さまが台無しにしたのだ。苦勞している親と自身のために頑張ってきた自分にしてみれば、奈落の底に叩き落とされた気分だった。

仮に、自分の人生設計云々を抜きに考えても、お嬢さまの行動は自分勝手なものであり、他人に深刻な迷惑をかけた悪事ではない。情状酌量の余地はないのだ。

「なんつー悪女！ ……いや待て。おれを陥れたのはわかったが、なんでお前がここにいるんだ？ ここはダメ学生の巣窟で、お前のいるべき場所じゃないだろ」

「オーホッホ！ 愚問ですわよ墨根仁っ。どん底に落としたあなたに、とどめを刺しに来たに決まっているじゃありませんの！ この【特別教室】で成績勝負よ墨根！ わたくしの魅力と性技で跪かせてあげますわッ!!」

「成績勝負だと…？ ここでは、家畜みたいに種つけしたりされたりするんだろ？ そんなのでどう競うっていうんだ…」

「競うのは子作り能力の優劣ですわっ。いかに女性を、あるいは男性を自分の虜にして孕ませたい気持ちにさせるかですわよッ」

お嬢さまが胸を張って力説し始めたとき、教室の引き戸が開いた。

「ホームルームを始める。全員、居住まいをただせ！」

入るなり怒鳴つたのは、目元を完全に隠すサングラスをかけた若い女性だった。

夜空よりも暗いジャケットとマイクロミニのスーツを着込み、スカートの裾からベルトをはみ出させるガーターベルトストッキングを身につけている。履いているのは、粘膜のようにテラテラしている真っ赤なピンヒール。抜群にグラマーで、大人の色気を醸しているが、見るだけですくんでしまう位に威圧的な女だった。

（触ると切れそうな感じだな。関わり合いになりたくないタイプだ……）

墨根が胸中でひとりごちていると、お嬢さまが話しかけてきた。

「墨根、あなたの席はこちらよ」

そう言つて、手を取り引つ張る。

案内されたのは窓際の一番後ろの席だった。五メートル離れた隣の席はお嬢さまのものらしい。彼女はそこにつく。

「ごきげんよう、ぼんくらども。私は百花繚蘭ひゃっかりょうらん。貴様らの担任だ」

（ヒヤッカリョウラン……偽名っぽい名だ。それに、教え子をぼんくら呼ばわりとは）
重なる非常識に渋面になつた墨根が胸中で呟く。

「今から教科書兼生活の手引書の冊子を配る。授業のしおりと思えばいい。受け取ったら名前を書け。他の者も同じ物を持っているからだ」

（うわ、小学生向けの注意っ。どんだけおれたちを下に見てるんだよッ）

墨根が眉間に縦皺を刻んでいると、教室の引き戸が開く。

ぞろぞろと入ってきたものに、墨根だけでなく他の学生の目も点になった。

「ピー、ガー ヒャツカリヨウ センセイ シオリノ ハイフニ ハイリマス」

感情がなくて甲高くて、ラジオのようにこもった声が教室に響いた。

「やってくれ、《せいいくん》」

小学生位の背丈のそれに、女教師はごく自然に首肯する。

絡み合う青い♂と赤い♀を額につけた、坊主頭の三頭身。

直線の眉にごまのような黒目。全身肌色のずんぐりむっくり体型。

両手をバタバタ動かして、持ってきたしおりを配っているが、大根よりも太い両足はび

ったり閉じて動いていない。移動は足の裏のキャタピラでしているものの、無限軌道特有

のけたたましい音はほとんどなく、とても静か。

そんなものが十八体いる。

「自律稼働ロボットか……新聞で見たどの試作品ともぜんぜん違うぞ」

顔を引きつらせて墨根が呟く。

人間の行けない場所や、人手のたりないところで活用するため、大企業はロボットの開

発に勤しんでいる。空想の中の科学が実現されてきている現状は知っているが、自律稼働ロボットが巷ちまたに導入されているなど聞いたことがない。それになにより、

（外見がふざけすぎてる。キャタピラなんて、段差はどうするんだ？）

やたら高圧的な女教師といい、現実離れたロボットといい、目眩がする。

「ドウゾ ハナゾノ ピュアラ エレクトラサン」

「ありがとう、《せいいくん》」

五メートル隣では、ロボットにしおりを渡された美女子が、優美に受け取っていた。

血の通わないロボットに向いているとは思えない、上品な笑みを浮かべている。

「ドウゾ ボクネ ジンクン」

墨根の席に来たロボットが、しおりを机に置く。

ドスン！

重低音の着地音とともに、机が揺れた。

「これがしおりだと？ 百科事典並みに厚いじゃないか……！！」

黒いハードカバーには、金色の文字ででかかど【真人口対策特別教室のしおり】と書

かれていた。

「コノ シマデノ セイカツノ シカタ ダンジョノ カラダノシクミ セックスノ テ



休憩も十分とった今ならば剃毛に限らず、どんな実習でも上手くやれるだろう。

「強気な台詞は、今ここで百点の評価をもらってからにしてはいいかがかしら……トーゴーちゃん、始めてもよろしくて？」

お嬢さまが側に控えていたロボットに訊ねる。

「ピー オフタリノ カイワノ サイチユウニ スキャンハ シュウリヨウ エイセイメン ケンコウメンニ モンダイハ ナシ ジツシュウヲ ハジメテ クダサイ」

「おうっ。そんじゃおれからだ。いいな」

「構いせんわ。補習で百点という腕前、拝見いたします」

不敵に微笑するお嬢さまは、おもむろにスカートの両端を掴み、めくりあげた。

「なっ!? 華園……お前！」

露わになったスカートの奥を見て、墨根が瞠目する。

この島に彫り師がいるとは思えない。タトウーではなく水転写シールだろう。

お嬢さまのスレンダーな腹部には、ピンクの丸文字シールが数枚貼られている。

文面は、『パイパン上等♥』。ご丁寧に秘部を指す矢印のシールまで貼ってある。

さらには、ショーツがない。

様子といい形といい、昨日の女教師を彷彿とさせるほど丁寧に刈り込まれた金色の恥毛

地帯が、教室の空気に直に包まれている。

「ラクガキにノーパンだどつ……服の下にそんな破廉恥な姿を隠し、今まで何食わぬ顔でいたというのか……華園カンパニーの社長令嬢ともあろうお前が!？」

どちらも授業のしおりに書いてあったものであり、子作りを円滑に行うためのプレイ。予習を厭わない勤勉なお嬢さまが知っていても不思議はないが、誰からも好かれる才媛がするにはあまりに下品だ。

「ラクガキノーパンだけではありませんわ……昨日から性器を洗っておりませんの」

「いつも清潔感あるお前が、大事なところを洗っていない!! ……いや、ちょっと待て……そのロボットはさつき、衛生面は問題ないと言ったろ」

「トーゴーちゃんに相談したら、合理的な理由がある場合は許されることがあると教えてくださいましたの」

「合理的な理由?」

墨根は首を傾げた。不潔でいることに正当な理由があるとは思えない。

「この授業のためですわ! ククク……ねえ、墨根」

「な、なんだ……」

反射的にたじろぐ墨根。お嬢さまは邪悪な笑みを浮かべている。

「あなたの真面目さとウブさは、昨日のことで証明済み。だからわたくしは考えましたの。どうすればあなたに剃毛をさせられるのかを。これがその答えですわ！」

「ぜんぜんわからんつ、どういう意味だ！」

「簡単ですわ。あなたのためにわたくしが変態的なことをしたと知ったら、あなたは必ず剃毛をしてくれる。そうではなくって？」

絶句する墨根。

（こいつが似合わないことをしたのは……おれを剃毛に駆り立てるためなのか……ッ）

捨て身ともいえるお嬢さまの行動の原因は自分。そう思うと、猛烈な罪悪感に襲われた。優美なお嬢さまにとって、自分を貶める真似はどれほどの苦痛だろう。

「わたくしの気持ちを理解してください。あなたなら、早く恥毛を剃って、綺麗にしてください。少ないかしら。少し痒くなり始めて辛い。あなたが剃ってください。少ない限り、わたくしはもつと辛い思いをすることになりますわ」

切なそうに眉根を寄せるお嬢さまは、陰部と太腿を小刻みに震わせて催促してくる。

「お前そこまで……」

自分を人質に取るような真似をされたら、確かに剃毛せずにはいられない。陰部を洗浄しないという行為は確かに、剃毛させるための合理的な手段だ。

「悪い華園、今ラクにしてやるからな………しかしお前、ほんと手段を選ばないな」
頭を下げる墨根。

直前まであった競争心は萎しぼんでいた。女教師に報いたい気持ちも小さくなっている。
占めるのは、追い込んでしまったお嬢さまへの罪悪感と、自分を傷つけるようなことを
してまで剃毛させようとするお嬢さまに応えたいという気持ちだった。

「ドウゾ オスキナモノヲ ツカッテ クダサイ」

ロボットのお腹の部分が前に開く。

道具は昨日と変わらない。墨根は補習で使ったのと同じ物を選んだ。

「すぐ終わる……じっとしていてくれよな」

「わかりましたわ……」

「絶対に傷つけないから信用してくれ……けど、どうしても嫌だったらやめる。そのとき
は我慢しないで言ってくれよな」

「ありがとう……ですが、わたくしはあなたを信用していますわ……身を委ねてもいいと
わかっておりますの」

ずっと見てきたという言葉が気になったが、信用しているという言葉ももらえたありが
たさの方が強かった。

(女の子が信用してると言ってくれたんだ。必ず完璧に終わらせる)

相手が自分を陥れた悪女なのを忘れたわけではない。

しかし、無防備に身体を委ねているときに考えるべきことでもない。

女教師にしたときと同じ位注意しながら、股の間を温め、クリーム塗れにし、剃る。

ジョリ……ジョリ……ジョリ……ジョリ……

身を委ねるといつても、やはり同級生に剃毛される羞恥と緊張はあるのだろう。太腿も秘唇の周囲も強張って、ときどき小さく震えている。

(動いてやりづらいな……でも、急いだり焦ったりして傷つけたら本末転倒だ)

肌を傷つけないようにしながら恥毛を剃っていると、お嬢さまが溜め息をついた。

「ああ……すぐく心のこもった剃毛ですわあ……よろしくてよ、墨根」

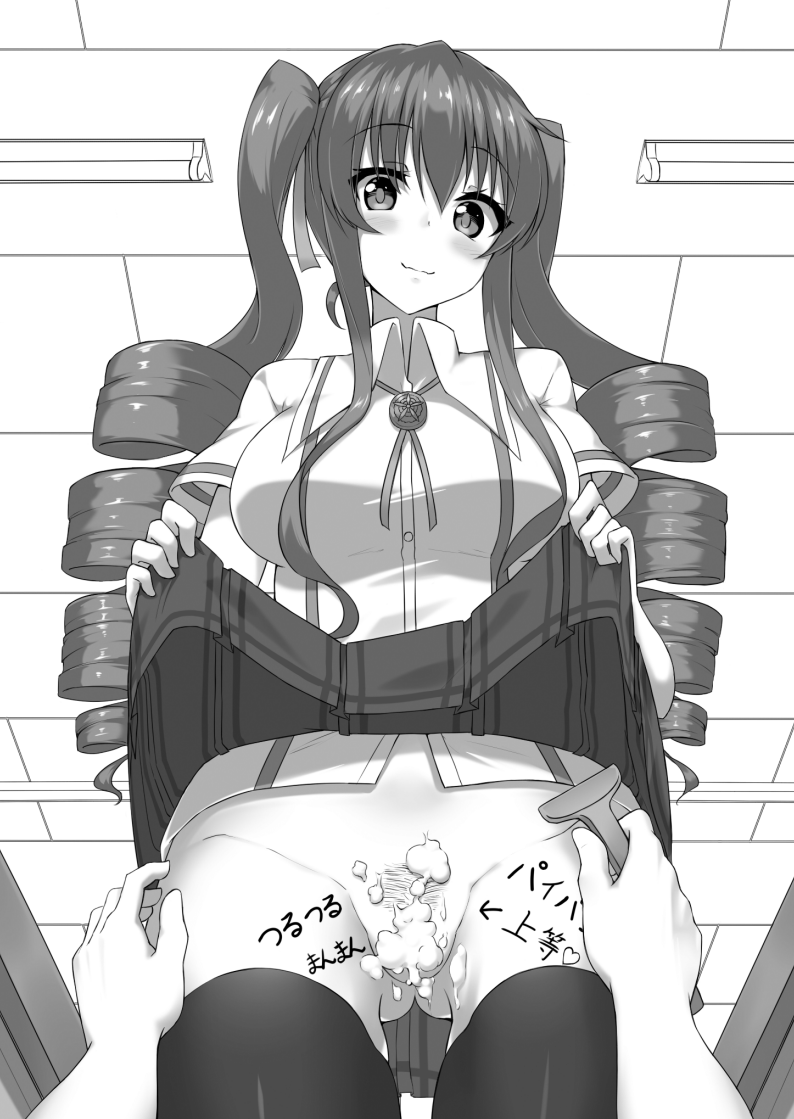
「心がこもっているとかわかるのか？」

「わかりますわ……あなたのわたくしに対する愛情が溢れていますもの」

「いや、断じて愛情なんぞはないぞ。今だけはお前の仕打ちを忘れ、自分を騙して誰よりも大切に思うようにしてはいるが」

「あら、そうなの……」

見当違いのことを言っただけで恥じているのだろう。お嬢さまは少し肩を落とした。



うるうる
ぷぷ

パティ
←上等♡

「お互い、こんなに発情して、獣みたいになっっているのだ。アソコ、などという上品な呼び方は不適切だ。牝穴（むすね）と言え。わかったらさっさと愛撫しろッ！」

女教師は体重と膂力（りきよく）を込めて秘唇を顔に押しつけてくる。

「す、すみまひえん……おめすあなあいぶしまふっ……!!」

ヒップに力を込めてグイグイ押しつけられ、半ば口が塞がれているので、どうしても情けない声になってしまう。格好の悪い声だと思いつつ、墨根は気を取り直す。

（さっきまでは指だったから、やっぱり今度は口と舌だよな）

責め方を変えていった方が飽きられないという、しおりの記述を思い出す墨根。

男子は左右の秘唇の中央に両手の指を当てると、ゆっくり限界まで広げた。

「なっ!! 広げるだど……!!」

秘唇を左右に広げられた刺激で、女教師のヒップが浮かんだ。

口と秘園が離れて普通に喋れるようになった墨根が説明する。

「こうすると奥まで舌が届きますからね。いつもは閉じている部分が、男の指で広げられているっていうのも興奮のスパイスになるって、しおりに書いてます」

「それはそうだが……童貞とは思えない大胆さだぞ……くうっ……」

早くも女教師は期待しているらしい。半脱ぎ半スーツの全身をぶるりと震わせた。

「根本まで舌を入れてペロペロしてあげます、先生」

舌を突き出した口元を近づけ、汗と愛液で潤った秘唇に口づけする。

「んんっ……はあああううう……！！ し、舌が……若い男子の舌が入ってくるう」

挿入されたただけだというのに、女教師の膣が一気に熱くなった。

ドツと愛液が溢れ、こちらの口の周りをベチョベチョにする。

(指だけじゃなく、おれの舌でも感じてくれてるんだ……すげえ嬉しいっ)

舌も指に劣らない敏感な部位。

膣肉全体に締め付けられるのは、射精しそうな位に気持ちよく、好意を持つ女性が悦んでくれているという事実が拍車をかける。

墨根は嬉しさと胸をいっばいにしながら、舌をそよがせた。締め付けられているのを利用して女壺全体をやんわり揺すぶる。

「あうッ……私の中をミッチリ埋める舌が擦れて……はあっ、はあッ……」

膣内に走る快感のあまり、女教師は男子の両足にしがみつく。

「これほど感じさせられるなど……愛撫を受けてそこまで昂っていたのか……？ 確かにイキそうになっただけ……」

思いもよらない言葉に、墨根はハッとしたり。

「先生、おれの愛撫でイキそう……オーガズムを迎えかけてたんですか……!!」
女を絶頂に導く手前だった。

そう思うと男として誇らしく、質問する声は自然に弾んだ。

「ち、違うッ、貴様の聞き間違いだ……私は断じて………はあッ、はああッ、あうう
……くうッ、こんな年下にいつまでもいいようにされるものかつ」

担任は男子を脱がし、そのペニスに両手を伸ばした。

亀頭の下半分を覆う皮を左右から摘んでゆつくり剥く。

「うっ……いきなり先っぽが涼しくなった……先生が剥いてくれたからか」

皮の拡張感の後に訪れた清涼感と解放感は心地よかった。

女教師の手つきに、嫌々やっっている雰囲気になかったことへの喜びが快感に拍車をかけ、肉棒がますます熱くなる。

「う、嬉しいいつ……え？ お、おとおおおおおッッッ！」

墨根が喜んでいると、肉棒の先っぽから根本までが熱い粘膜に包まれていった。

「せ、せんせい!? な、なにしてるんですかつ」

見れば、女教師はペニスを丸ごと口に含んでいた。

艶やかな後れ毛をかきあげて一息ついていっている様子が艶めかしすぎて、思わず射精しそう

になったが、なんとか堪えて叫ぶ。

(す、すげえいい……熱くて柔らかくて唾でヌルヌルの口内粘膜に包まれて……あうっ、びったり吸い付いてくるっ)

経験のない快楽に腰をビクつかせていると、女教師がサングラスで流し目を送ってきた。なんとなく悪戯っぽい雰囲気だと思った刹那、思い切りバキュームされてしまう。

ジュブブブブ！ ジュボウウウ……ジュブッ！ ジュブッ！ ジュブブブ！

「あああっ、う、うああッ、せ、せんせいっ……先生ッッ……！」

ペニスが蕩けそうな快楽が腰を貫いた。

堪えた射精衝動がぶり返し、肉棒の根本がカアッと熱くなる。

(まずい……で、出るっ……まだ先生をイかせてないのに……ッ……！)

愛撫しあう実習のための練習だというのに、一方的に絶頂しては意味がない。

墨根は菌を食いしばって射精に耐える。

(ああ、でも……先生のあの、カモノハシみたいなの……ひよつとこみたいなの顔っ……おれのペニスをバキュームしてる顔……色っぽすぎる……!!)

担任はペニスを根本まで頬張って、影の濃い窪みができるほど頬を凹へませている。

普段のクールな様子からは想像できない、滑稽で下品な顔だった。

他の人間が見たら笑ったり軽蔑したりするかもしれないが、墨根にとってはこの上なく淫らで扇情的な美顔で、見ていっただけで肉棒が大きさを増していく。

(ダメだ……もう、出る……っ………え……?)

吸引快楽に抗う力がなくなつたのを自覚して、女教師の口の中に精液をぶちまけると思つた瞬間、彼女はペニスを解放した。

「ちゅぽっ……サイズは普通だが、若いだけあつて反りが強いし勃起ぶりに勢いがある……れろっ……れろっ……なかなかのものだ……んっ……」

今にも爆発しそうな先端を軽く摘み、自分の唾液でヌラヌラ光る竿部を何度も舐めあげながら言ってくる。

舌で強めになぞられる快感が肉棒の芯を痺れさせ、口の奥から吐き出される熱い吐息を浴びせられる悦楽が射精欲望を煽る中、墨根は思った。

(射精せずにすんだのはよかつたけど……もつたいなかつたような……うう……でも、このままこうされていて、そんなにもちそうにないぞ)

バキュームフェラで絶頂しかけたことに未練を憶えながら、その後の丹念な竿舐めに太腿を強張らせる男子。限界がくる前に女教師をオーガズムに導こうと思ひ、驚掴みするヒップを引き寄せようとしたとき、彼女は信じられないことを言つた。

「クク、少し責められただけで、射精したそうにビクビク震えて……れるお、れるお……童貞らしくて可愛いな……墨根、これからお前のものをしゃぶってやる……射精したくなつたらいつでも出すのだぞ？ ぜんぶ飲んでやる……はむううつつ」

担任はまた根本まで唾え込むと、先ほど以上に頬を瘦けさせて吸い付いてきた。しかも、ゆっくり頭を振り始める。

「くうっ……うッおっ、おとおおおお！ す、吸われる、扱かれて、舐められる！」
強く吸い付かれている肉棒の根本から先っぽまでがジュブジュブと扱かれる。

サングラスの年上は同時に舌を使い、自身が剥き出しにさせたカリの表も裏も舐め回し、排泄口の鈴口すらも軽くほじって愛撫してくる。

「き、気持ちいいッ！ さ、さささ、最高うううッッ！ 今度こそ射精する……ッ！」
墨根にはマスターベーションの経験がない。

友達がいけないものだから猥談で知識を得る機会などなかった上に、学園の性教育も性欲処理のことを教えはしなかった。だから射精は精通や夢精のみだったが、眠っていても精液が出るとき——射精の感覚はわかる。それが今、自分のペニスに起きている。

（今までの精通や夢精の比じゃない……ずっと気持ちいいぞっ）
そう思わせるほど肉棒の内部が悩ましくうねっている。

(このまま射精するのはダメだッ……いくら先生が許してくれていても、甘えたら男が廢るってもんじゃないか……先生にも気持ちよくなつてもらわないと……!)

身体を開いて優しくしてくれた女性が口でもしてくれたのだから、お返しをしたい。好意に甘えて快樂を貪りたいという気持ちが心に広がる中、童貞は辛うじて思った。
ワシッ!

墨根は女教師の桃尻をありつた力の力で掴み直すと、自分の顔へと引き寄せた。

「んああッ……ば、墨根、私のことはいいから、お前だけ射精してしま——あうッ!」

限界まで舌を埋め込んではお尻を持ち上げ、また引き寄せる。男子の膂力を駆使した舌ピストンをすると同時に唇を陰核に当てて刺激し、愛液がなだれ込んでくるほどの強さでときどき女壺を吸い上げる。

「なッ、き、貴様あッ、それが童貞のすることかア……まずい、まずいッ、まずいッ……教師なのに教え子に、ああッッ、年上なのに未経験者にイカされるうつつ!!」

大量の涎とともに肉棒を吐き出し、あられもなく舌を突き出す女教師。

男子の凹凸が多い舌で膣ヒダを引つ搔き回され、唇で陰核をリズムカルに押され、女壺全体を吸い上げられる快樂を一気に味わわされて、泣き言を叫ぶ。

担任の膣肉の一片一片はカアッと熱くなり、驚掴みにするお尻がビクビクと粘く震えて



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!